

入れ替わる「親」と「子」、そして「語り手」 ——中上健次『地の果て至上の時』論

早川 芳枝 (TIEPh)

キーワード：中上健次、『地の果て至上の時』、語り手、折口信夫、マレビト

1. はじめに

中上健次『地の果て至上の時』（書き下ろし、新潮社、1983年）は、作品内における時間軸上では「枯木灘」から三年後として設定されている。秋幸が異母弟の秀雄を殺害した罪で三年の服役をおえ、故郷へと帰還するところから物語がはじまる。むろん「枯木灘」とは語り手の位置や浜村龍蔵と秋幸の関係性の相違などから単純な続編とは捉えられてはいない。先行研究によって中心的に指摘されてきたことは浜村龍蔵の位置づけの変化と、モンという不十分な語り手の存在である。

前者においては、柄谷行人によって「すなわち、幾度も父殺しが暗示されているにもかかわらず、その「父」は、ほとんど最初から「息子」の子としてあらわれている。いいかえれば、最初から、メタレベルが対象レベルに降りてきている。すでに、父殺しは不可能なのである」¹と指摘されている。柄谷は「枯木灘」において浜村龍蔵は「神」のように超越化されているとも述べているが、そうしたメタレベルの存在を対象レベルのものとして描くことによって「モダンな小説そのものを自壊させた」と指摘する。

こうした（物語も含めた）小説論は小森陽一がつとに言及しており、「自己言及の不可能性」²においてラカンを援用した分析を行っている。「秋幸の立っている空間と時間は、象徴界と想像界が重なりあいながら、両方向に引っ張りあっている裂け目に他ならない」として、その理由を浜村龍蔵が「父の名のシニフィアンであることから降り始めてしまった」ことに求めている。つまり両氏ともに浜村龍蔵の描かれ方と小説の構造そのものが不可分の関係であることを指摘しているのである。

一方で多くの先行論が語り手の問題にも言及している。早く川村湊は「「世界」の輻輳」³において、語り手モンを『千年の愉楽』（河出書房新社、1982年）のオリュウノオバと対比し、「世界を透視し、物語の各場面に偏在するような自由自在さを持ちえないこと」を作品の「構造上の欠陥」の一つと指摘している。また菅野昭正も「地の果ての向こうには……」⁴において「記憶装置であり情報センター

¹ 柄谷行人「解説」（新潮文庫版『地の果て至上の時』、1993年）

² 小森陽一「自己言及の不可能性—『地の果て至上の時』のまなざし」（『ユリイカ』1993年3月）

³ 川村湊「「世界」の輻輳」（『文芸』1983年7月）

⁴ 菅野昭正「地の果ての向こうには……—中上健次『地の果て至上の時』を中心に」（『群像』1989年12月）

でありながら、この酒場のおかみは本来のコロスとちがって、観客（読者）に事情を逐一説いてきかせる善良な金棒引きではなく、大事なことは黙って肚のなかに収めておく考えぶかい証人とモンを評している。モンは全知全能ではなく、場合によっては語らない語り手となり得る存在なのである。

しかしながら先行論が指摘しているこれらの点については、中上自身が「物語の系譜・八人の作家」⁵において自注自解めいた指摘をすでに行っている。言うまでもなく、作者自身の解説が絶対的に正しいなどと考え、それを主張するつもりは毛頭ない。しかし『地の果て至上の時』を執筆するにあたり、中上が何を考えていたのか、その文学的「実験」が作品内にどのように作用しているのかを解明する意義はあるはずだ。

それはとりもなおさず「モダンな小説そのものを自壊」させた方法の解明であり、「小説が物語をただ見る地点と瞬間とを露呈する言説の運動」⁶を明らかにすることに他ならないからだ。本稿では中上の物語論の萌芽が見える「紀州・木の国根の国物語」⁷と、「物語の系譜」およびその前哨である部落青年文化会連続公開講座「開かれた豊かな文学」⁸を中心に分析する。そしてそこで確立した物語論（小説論）がどのように『地の果て至上の時』に反映されているかを明らかにする。

2. 中上健次の物語論／小説論

前章で述べたとおり、中上の物語論の萌芽といえるものは「紀州・木の国根の国物語」に見える。いや萌芽というよりも、すでに形をとっていたものがここでようやくまとまって書き記されたと言わなければならない。中上が小説あるいは物語について述べる時、それは自然（日本的自然）と不可分の形で語られる。

聖なるものの裏に賤なるものがある。賤なるものの裏に聖なるものがある、とは小栗判官でもあり、日本の文化のパターンでもあろうが、紀州、紀伊半島をめぐる旅とは、その小栗判官の物語の構造へ踏み込む事である。（中略）差別の構造とは何か、これもまたここで論じる時間はないが、この日本において、差別が日本的自然の生みだすものであるなら、日本における小説の構造、文化の構造は同時に差別の構造でもあろう。

このルポルタージュが書かれたのは1977年であるが、すでに1980年以降に上梓され、短篇集『千年の愉楽』に収録される作品で描かれる「高貴にして澱んだ血」を先取りするかのような言及である。差別が物語を生み、差別の背景にあるのは日本的自然であるという分析は、天皇の存在を導入するこ

⁵ 「物語の系譜」は、1979年2月から10月までに6回、1983年8月から1985年6月までは13回断続的に連載された。なお連載時「八人の作家」と銘打っているが、取り上げられた作家は五人である。

⁶ 前掲注2

⁷ 『朝日ジャーナル』の1977年7月1日号から1978年1月20日号にわたって連載された。本稿での引用は初出誌による。

⁸ この公開講座は、柄谷行人・渡辺直己編『中上健次と熊野』（太田出版2000年）に収録されている。はじめは百部限定で非売品の小冊子『開かれた豊かな文学』（1994年、中上健次）に収録され、その後『中上健次と熊野』に再校訂を経て再録された。

とでさらに深化していく。この自然と差別、被差別をめぐる言説は松阪の回において天皇とともに語られる。その後、伊勢の回に天皇と天皇が所有する言葉と日本的自然、ひいては差別被差別の問題へとより具体的に踏み込んだ内容となっていく。

伊勢の神宮文庫を訪れてその図書目録を前に圧倒され、「明治以後の現代小説は数えるしかなかった」事実を述べた上で、その神宮文庫のあり方に次のような感想を吐露している。「私がここで見たのは神宮あるいは「天皇」の言葉、詞に対する自信である。天地の分かれる創世記の時代からコトノハを持っている。光を光と、闇を闇とコトノハを与えた自信である。天皇がコトノハ、文字という言葉によってこの国を治めている、と思ったのだった」⁹と。

実際に、この日本で現存するもっとも古い書物とされているのは『古事記』¹⁰であり、そこで語られているのは天皇家とそれに仕える群臣たちの家の由来、天皇の統治の歴史である。その日本でもっとも古く、この国が国として成立した(国史と律令を備えた「日本」として遣唐使を送った)最初期の時代から言葉を所有していた天皇家の「自信」を中上は読み取っているのである。古代天皇家とはまさに言葉を所有し言葉を支配することで、日本を支配してきた。『古事記』および『日本書紀』¹¹という最古の歴史書に自らをアマテラスの後裔と記し、統治者としての正統性を書き記すことで日本を支配してきたといいどころ。

しかしながら、中上が「言葉によってこの国を治めている」と言う時、それは右記のような歴史的背景を述べるだけにとどまてはいない。同じ伊勢の回で「草は草である。そう思い、草の本質は、物ではなく、草という名づけられた言葉ではないか、と思う(中略)言葉を統治するとは「天皇」という、神人の働きであるなら、草を草と名づけるまま呼び書き記すことは、「天皇」による統括^{シタツクス}、統治の下にある事でもある」とまで言いきっているからである。つまりソシユールでいうところのシニフィアンとシニフィエを結び付ける働きまで(古代)天皇の統治の一環であったという認識である。そしてその統治は現代まで続いており、それを食い破る方法として次のような可能性を指摘している。

もし、私が「天皇」の言葉による統治を拒むなら、この書き記された厩大なコトノハの国の言葉ではなく、別の、異貌の言葉を持ってこななければならない。あるいは書くこと、書かれることを拒む語りの言葉か。

ここで特に着目すべきなのは、中上がこだわっている対象が書き言葉であることだ。つまり草を草と呼ぶこと以上に草を草と書き記すこと、その部分が「統治の下にある」という判断なのである。書き言葉と事物の結びつきを攪乱し、言葉の統治を拒むために用いられるべきは文字と直接的、対称的には結びつかない語りの言葉と捉えている。このことは部落青年文化会連続公開講座「開かれた豊か

⁹ 「木の国・根の国物語 51 伊勢」(『朝日ジャーナル』1977年10月21日)

¹⁰ 冒頭に付された「序」(上表文)に従えば和銅5年(712)年の成立。しかしこの「序」は本文完成よりやや時代が下ってから作成・添付された物とする見解も大和巖雄、三浦祐之などを中心に存在する。しかし『古事記』本文には「も」の万葉仮名に上代特殊仮名づかいが存在しており、本文は七世紀後半に成立していた可能性が高い。

¹¹ 養老4(720)年に完成した現存最古の正史。『古事記』と異なり、『続日本紀』にその存在と成立経緯が記されている。

な文学」でも繰り返し引き合いに出されており、一過性の思いつきではないことが裏付けられる¹²。

そしてこの連続公開講座での講演は回を進めるごとに物語、自然、マレビトが密接に結び付けられて論じられていくことがわかる。まず第一回講座では自然が生みだす差別とそれを食い破る物と直結した言葉（文字を介さない言葉）について次のような言及がある。

自然なるものが差別を作っている。自然なるものが被差別部落を作っている。そうすると、その自然をひっくり返す、あるいは自然の神秘みたいなものを、確実に白日のもとにさらけ出して、それをこう逆立ちさせるとというのが、つまり物と直結した言葉ではないか。

実はこの自然が差別を生みだすことについては聴衆からの質疑とそれに対する応答が記されている。中上は自然が差別を生みだすということを生け花にたとえ、ある美意識に基づいた「作品」を作るに際してカットされる部分があること、その部分にこそ意味があると解説を加えている。この一定の美意識によって何かを表現する際に切り取られ隠されたもの、それがうつほという名の神話的空間であり、それが後の物語では熊野によって同等の機能を果たさせることになるとしている¹³。

どのような論理が展開されているのか、順を追って公開講座の内容を検証したい。まず、第三回講座「うつほからの響き 神話から物語へ」（1978年4月1日）では「物語を死滅から回復させるにはもういっぺん、このうつほってものを考えなくちやいかんのじゃないか。確かめなくちやいかんのじゃないか。うつほにいっぺん行ってみて、うつほから物を見、声を出さなくちやいかんのじゃないか」という主張がなされている。これはかつて拙稿¹⁴で触れたことがあるのだが、マレビトの立場で物を見て、物語を語ることを示している¹⁵。

だが従来の物語からすると、それは極めて異例の事態である。中上は第五回講座「王の出生の謎」（1978年6月27日）においてマレビトを「王」ないし「親」、物語の語り視点の「王子」または「子」と規定する。その上で「物語がですね、一体、誰の目を通して物語られるかっていうことなんです。（中略）その物語の主人公とは、たえず子としての位置、子としての視点からできてるんじゃないかっていうことなんです」と述べ、マレビトたる「王」ではなく「子」が視点人物として設定されてきたという見解を示している。

そしてその「子」を背後で支えているものこそ「王」であり、これは近代文学において「ほとんど

¹² 第一回講座「物と言葉」（1978年2月5日）には「天皇を無化する、あるいは引っくり返す方法というのは、いわゆる物と直結した言葉だけでしかない」と言うかと、（中略）自然の状態から言えば、自然をこう逆立ちさせる、自然を暴きたてるみたいなの、そう言う形ではないのか。」という発言がある。

¹³ 中上は『義経記』の弁慶が熊野の山に捨てられた子であること、小栗判官が業病の治療のために熊野の湯を目指すことなどを例示している。つまり、死と再生両方の機能を有する神話空間ということである。ちなみに『古事記』の神武天皇東征物語でも、天皇一行は熊野の神の神気にあたって心神喪失状態になった後復活している。

¹⁴ 拙稿「中上健次における折口信夫受容—折口学（小説化）の試みを探る—」（『東洋大学大学院紀要』第45集、2009年3月）

¹⁵ 第五回講座「王の出生の謎」（1987年6月27日）では「物語というのは、（中略）マレビト伝説みたいなものと、分ちがたく結びついている。（中略）『竹取物語』のかぐや姫でも、一種のマレビトととっていいと思うし、『宇津保物語』のうつほの中に暮らした藤原仲忠っていう少年も、やっぱり別種のマレビトととっていい」と述べており、うつほからやって来る者を一種のマレビトと見なしていることが伺える。

欠落していて、その背後に自然っていう形があって、王子の純粋性を「保証」としている。なお、この直前に「近代文学っていうのは、ほとんどこの異物が入ってくることを忘れてたんですよ」とも指摘しており、異物（マレビト）＝うつほ（神話空間）と言いかえることができる。さらにこの「王」すなわちマレビトと自然の関係については次のような分析を加えている。

王とは自然をこう背負ってきたわけなんですね。つまり、王の秘密っていうのは、自然の秘密じゃないか。王の秘密を暴くことは、自然の秘密を暴くことにもつながるんじゃないか、という気がするんです。（中略）その自然の謎のことを、われわれの民族、われわれの祖先たちは貴種流離譚という形で語り伝えてきたんじゃないかということを考えるわけなんです。

ここで言う自然がいわゆる nature としての自然に単純には置き換えられないことは明白である。むしろ人間だからこそ必然的に持つてしまう歴史や来歴に近い。この点については第四回講座「みなし児・私生児 王子の正統な位置」（1978年5月27日）で「性、セックスっていうのは、要するに徐々に段階をふんで蓄積されてくる。性が蓄積されてきて、なぜ自分が親なのか、子供なのかってことが、いわゆる差異として、個体と個体の差異、違いとして分かってくるんです」と説明している。人間としての自然の営みが、時間の蓄積の中で作っていくもの。それもまた自然であり、時間の蓄積をとおして生まれた関係性を説明すれば物語そのものになる。さらに中上は「動物の場合、小鳥なんかの場合だったら」、「その性は積み重なってはいかない」とも指摘する。後述する『地の果て至上の時』との関連で大変示唆に富む発言である。

さて、この講座は第八回（1978年10月7日）をもって終了するが、この物語・自然・マレビトに関する問題はこの後も引き続き中上によって考察が進められ、深化を遂げていくことになる。それが『国文学』における連載「物語の系譜」である。1979年1月に始まった連載は、佐藤春夫、谷崎潤一郎、上田秋成、折口信夫と続いていく。そして同年9月に渡米したことで、一10月号に「折口信夫（中）」が掲載されると、長い長い中断を挟むことになる。この中断前は公開講座のテーマを引き継いでいるが、1983年4月に『地の果て至上の時』が刊行され、同年8月に再開されると「親」「子」とは別に「語り手」の存在がクローズアップされてくる。

論者は前掲の拙稿で、短篇「重力の都」（『新潮』1981年1月）が、『地の果て至上の時』と「物語の系譜」後半を書く上での布石となっていた可能性を論じた。『地の果て至上の時』の先行論においてはしばしばモンの語り手としての不十分さを論じる向きが見られるが、「物語の系譜」後半を見る限り、意図的な戦略であることは疑いようがない。「物語の系譜 折口信夫（下のI）」（『国文学』1983年8月）を見てみよう。

まず物語という物がまさに物を語る事によって出来るシステムであり、語られる物、語り手、語ってもらう者（聞く者、読む者）という三つのレベルに分解されるという暗黙の了解に達しているという事実がある。語り手（仮母）は絶えず語ってもらう者（子）に野合しようと装う。だが物語そのものは語られる物（親）の所有なのだ。

再開第一回目で語られていることは、語り手が親子の間に介在していることと、物語の帰属先の確

認である。これは中上自身の生い立ちに照らし合わせて考えれば理解しやすい問題でもある。実の父とは生活を共にしたことがない。しかし、周囲は「あの男がお前の父親だ」と語り聞かせる。なぜその男が親であるのかという物語は、男自身と語り手にとっては既知の事実であるが、子にとっては謎でしかない。その物語は「子」の側には帰属しないものである。

とはいえこの関係は不動のものではない。いや、むしろ流動化させることで「自然を暴く」ことが可能になる。言いかえれば公開講座や「物語の系譜」で述べてきた「物語」や「折口学」を「ズラし逆立ちさせる」ことでもある。やや長くなるが、「物語の系譜」の「折口信夫（下のⅡ）」（『国文学』1983年9月）を掲載された図形とともに引用する（図形は論者が模倣した）。



この図では語り手は影のように薄い。この図では語り手が実権を持つ。子に則して親を語れば親は出所来歴の定かでない狂暴な者となり、親に則して子を語れば子は小さなやはり来歴の定かでない者となる。（中略）親も子も語り手が介入し入力の場合で神の位置に押し上げられている。



図に書けばこうである。（三角形の一論者注）頂上に誰が来ても変わらない、物語は推察されるところ三位一体という形になっている。

ここで中上は「三位一体」などという言葉を使っているが、三者が安定的な関係ではないことは次号の解説を見ると明らかになる。いわく「三角形は姿を変えてどこにでもある。ただその三角形は常時はげしく回転し続けているので、外からは円のように見え円に包摂されているように映るはずである。円はさらに回転する」¹⁶と述べており、「親」「子」「語り手」の立場が常時くるくると入れ替わることが、物語を前に進める機能であると分かる。

3. 『地の果て至上の時』における「親」「子」「語り手」

さて、「はじめに」で柄谷・小森両氏の論を引用した際、浜村龍造が「父」の位置から「息子」の位

¹⁶ 「物語の系譜・八人の作家 折口信夫（下のⅢ）」（『国文学』1983年10月）

置に降りてきているという共通の指摘があったことは確認した。また、川村・菅野両氏がモンの語りの不十分さを（好意的であるか否かの差はあれど）指摘していることも述べた。これら二つの評価はいずれも妥当かつ不可分の問題であり、中上があえて取った戦略であることは明白である。まずは龍造と秋幸の親子関係の変化を確認する。

秋幸は今、はっきり分かっていた。浜村龍造は最初、町の間にも路地の者にもどこの馬の骨か分からない、どんな育ちか分からないという名前のない男だった。（中略）だが、秋幸もまた私生児として、他所から流れてきた者らが山の端に集まり住んで出来た路地に生れた、どこから来たのか分からない男だった。秋幸の出所をあかす路地は消しゴムで消されるように消えていた。

（81 頁）

このように浜村龍造はどこから来たのか分からない謎の存在として表象されてきた¹⁷。しかし路地の消滅とともに、秋幸もまた出所を失ってしまっている。そしてまた、路地がなくなったことは浜村龍造と秋幸の間に介在していた路地の噂という「語り手」が、その力を失ったことをも意味する。秋幸は浜村龍造に対して「今も、雑木の枝になるだけ体を逆らわぬように歩いている謎の体の大きな男には変わりなかった。子供の頃と今と違うのは、謎の大きな男は、声を掛ければ届く距離にあり、腕をのばせば届く距離にある事だった」という感慨を抱いている。両者の間には常に緩衝材のように路地があり、秋幸は噂を経由した浜村龍造しか知らずに過ごしてきた¹⁸。

しかし路地が消滅し、龍造がいわばメタレベルの不可触の存在ではなくなると、言いかえれば「枯木灘」から『地の果て至上の時』へと移行すると、状況は一変する。さきの「物語の系譜」にそって説明するなら、「枯木灘」において「親」「語り手」「子」という上下関係にあった秋幸と龍造は、『地の果て至上の時』にいたると、三角形の関係性へと変化するということになる。つまり「親」と「子」の逆転現象が起きるのである。

秋幸はきっぱりした口調で、「そんな事は後じゃよ。何も俺はこの眼で見とらん」と言い、わらい、「龍造よ」とまるで浜村龍造が秋幸の息子だのように呼んだ。浜村龍造が邪意のない子供のような笑みを浮かべるのを見て「刑務所の中で浜村孫一が何遍も夢枕に立つんじゃ」と思いつきを言った。「秋幸、おまえこそおれの現し身じゃ、龍造はお前の子供じゃ、と御先祖様が言うんで、おれが阿呆ぬかせとどなると、孫一のやつは何十代もの血の流れで一代ぐらい逆さまになってもかまうものかと言うんじゃ」（26 頁）

柄谷氏の指摘をまつまでもなく、秋幸が自ら進んで龍造を子供扱いし、龍造もそれに甘んじている、

¹⁷ たとえば「岬」（『文學界』1975年10月）には「一体、その男は、どこから流れてきたのだろう。（中略）人々の噂では山林ブローカーの上前をハネる、と言っていた。彼は、折にふれ入ってくる噂を耳にして、そいつが、ちっぽけな卑劣漢にすぎないとも思った。」とあり、実父の情報が噂として伝わってくる様を描いている。

¹⁸ 「枯木灘」（『文藝』1976年10月～1977年3月）においては浜村龍造の物語は、歪んだ形でしか秋幸に伝わらない。「有馬からこの土地に流れてきたというが路地の誰もその話を信用しなかった。（中略）男が先祖が誰々でと言いはじめののを聞き、あの馬の骨がと嘲った」とあり、直接その物語を「暴き立てる」ことは不可能に近い。

いや便乗しているとさえいえるのである¹⁹。それでは、龍造と秋幸が入れ替え可能な「親」と「子」であるのなら、モンは語り手に相当するのか？ これに対して論者は否と考えている。本当に彼ら二人、いや、彼ら以外にも「親」と「子」の関係にある登場人物たちの間にモンが入り込んで、一方に向かって他方の物語を語っているのか。モンがいかにも語り手らしく登場する箇所をピックアップして確認したい。

秋幸が浜村龍造と行ったのは山だと、秋幸の手下になった若い衆は言ったが、モンは違うと首を振った。モンは浜村龍造が秋幸をつれて浜そばの寺に入り、昔、浜村孫一が落ちて来た時に連れて来た手勢を先祖とする住職や町会議員に引き合せたと思った。浜村龍造の事だから浜村の傍系の者や手勢の血筋の者にひそかに招集をかけ、喫茶店か料亭にさりげなく待たせているかもしれなかった。(98頁)

よくよく読んでみると奇妙な文章である。秋幸と龍造が連れ立って山に行く。それを見送ったはずの若い衆の話を、その場にいなかったモンが否定している。そして、直後にモンの憶測は秋幸本人によって否定される。「秋幸はモンに、料亭にも喫茶店にも行かなかった。浜村龍造と別れ、ただ有馬の小屋に泊ったと言った」(99頁)のである。モンは『千年の愉楽』のオリュウノオバのような千里眼的視点からすべてを語るような語り手として設定されていない。もう一箇所確認してみよう。秋幸と龍造がちょうどお盆に重なる期間、二人だけで10日間の山歩きに出かけ、帰ってきた場面である。

モンの店に立ち寄った秋幸は十日間も山の中を歩いたにもかかわらず疲れた様子もなく前にも増して体の中から男臭さが立ち現われてくるような気がした。心の中で、二人の山歩きの理由を推測していたモンは男二人が山歩きたのは、八月十五日、この土地の盆が命日になった秀雄の霊に会いに行ったのだと考えていた。(189頁)

これより前の山中の場面で、確かに秋幸と龍造の間には秀雄の話題が出ている。しかしそもそも龍造は秀雄の霊に会いに行くという目的で秋幸を誘ったわけではない。戻ってきた秋幸にモンは「山歩いてったら何と出て来る気するやろ」と尋ねる。それに対して秋幸が何も出てこなかったと答えると、「モンは秋幸の話を聞いて失望した。秋幸の話では秀雄の命日に当る日に山の中で二人の男が睦言を交わすように絵空事を話していた事になると考え、息苦しく胸がつまった」(190頁)と勝手に評価を下すだけである。

『地の果て至上の時』は全486頁に及ぶ大著である。この語り手モンの心中思惟場面のページはいずれも作品の前半に存在する。まるでモンが信用ならない語り手であることを示しているかのようである。いや、信用できない語り手とまで言ってしまっただけでは語弊があるかもしれない。むしろモンは「親」「子」「語り手」の区分で言う「語り手」として認識すべきではない語り手、ある物語に対して別の解釈(むろん物語と言いうる)を持ち出してくる存在と位置づけるべきだろう。少なくとも彼女は「親」にはなり得ない。

¹⁹ さらに龍造はフサに対して「秋幸さんはわしの子じゃない。わしの親じゃ」(54頁)とまで言っている。

それでは、「親」「子」「語り手」の方の「語り手」は誰に相当するのか。結論めいたことを先に言ってしまうと、みな「親」にも「子」にも「語り手」にもなり得るのである。まずは秋幸・徹・浜村龍造の関係を確認する。水の信心から逃れてきた徹は、秋幸を絶対の神として位置づけ、死ぬという命令を渴望している。しかし、「死ぬ、と喉元まで言葉が這い上った」のにも関わらず、秋幸は全く異なる命令を下す。「秋幸は喉が裂けたように思いながら言った。「殺すんじゃないら出来るかい？ 俺は武器を持つとる。相手は俺の、実の父親じゃ」意外な秋幸の声を聞いた徹の眼に恐怖が涙の膜のように広がって行くのがありありと分った」（316頁）と、徹でさえ予想外な要求を言い渡される。

秋幸が本気で言ったことなのかどうか、言及はない。しかし、この時点で「俺は武器を持つとる」と秋幸が言っているのは、鉄男から名目上買い取った拳銃である。しかし、秋幸は徹に拳銃を渡してはいない。そのような場面もなく、唐突に庖丁で犯行が行われたことがモンを経由して伝わってくる。「秋幸さん、徹に何言うたん？」モンは訊く。（中略）「龍さんが言うんよ、徹がわしを殺しに来た、言うて。秋幸がいつでも入って来れるように書斎の戸あけといたら、徹が入って来て庖丁つき立てにかかったんじゃ、と言うて。庖丁をうちすえた拍子に膝に傷した言うて」（382頁）という蒙の話からは、秋幸から渡された拳銃ではなく、独自に入手した庖丁での犯行と思われる。

ところで、モンから伝わってくる龍造の言葉からは、秋幸が徹に指示を出したと明確に語られない。モンは龍造から徹が秋幸の命で犯行に及んだらしいと耳にしているのかもしれない。しかし、本当にそう言い切れない面もある。今度は徹経由で、浜村龍造が徹といさかいを起こしたという話が広まっていることが伝えられる。「秋幸がそれを耳にしたのは、徹からだ。徹の叔母にあたるユキが、人から徹が浜村龍造と諍い傷を負わせたとききつけたと、アパートに訪ねて来た。ユキは足に包帯を巻いている徹を見て、浜村龍造が徹に傷を負わせたのだと思い、ひとしきり憤慨した」（388頁）とあり、ユキが真実を歪曲して伝えているとは言われていない。

これではモンやユキをとおしながらも、龍造・秋幸・徹が互いに語ったり語られたり立場を入れ替えているかのようである。これに極めて似ている関係が、龍造・鉄男・秋幸の三人だ。紙幅の関係上詳細に論じられないが、秋幸は鉄男に脅迫される場面で「浜村龍造は銃口が自然と秋幸に向くように罵倒した」（282頁）と推定している。ただし実際に龍造が秋幸を殺害するように仕向けたかどうかは最後まで不明だ。一方で「ヨシ兄、鉄男の気持ち知つとるんこ。鉄男はヨシ兄と一緒に暮しとつた時、どんなにしたら親を殺せるかと考えたんじゃと。（中略）」秋幸は作り話をした（261頁）」とあり、秋幸がヨシ兄にいらぬ警戒を持たせるように仕向けている。

鉄男が秋幸を脅した際、「おまえの蠅の糞にムチャクチャに言われて、ワレが俺やオヤジをどう言うとののかきかされて」（282頁）と言っていることから、龍造が鉄男をそそのかして秋幸を殺害しようとした可能性は考えられる。しかし、鉄男が父ヨシ兄を撃とうとしていたという描写はない。あくまで浜村龍造の命を狙っていたのである。それを聞きつけた友一が「兄やん」と非難の声を上げることからも、秋幸が鉄男を使って龍造を殺そうとしていると周囲から認識されていることが分かる。

この友一の見解をモンもまた信じており、「それが実際に秋幸に可能なかどうか分らなかった。

秋幸が拳銃を隠し持っていたのを友一は目撃し、モンは教えられていた。秋幸は拳銃を一時秋幸の下で働いていたヨシ兄の子鉄男に渡し、撃ってみたいのなら、誰も彼もの敵、蠅の王を狙え、と命じた（452頁）と断定的な表現がなされる。しかしこれを「親」「子」と三位一体となる「語り手」と位置づけられるだろうか。龍造は鉄男に秋幸のことを語り、秋幸はヨシ兄に鉄男のことを語っている。モンは友一が語った「秋幸の父殺し」という物語をなぞっているだけでしかない。むしろ後の『奇蹟』（朝日新聞社、1989年）に登場するトモノオジとオリュウノオバの掛け合いのように、ある物語に対して別の解釈を提示するような語り手と見なすべきなのではないか。

ある人物の行動の動機なり心情なりを、別の人物が語る。それ故、正しい見解などというものは、そもそも描きようがない。いや、「語り手」が「親」について語ったこと以上のものは存在しないのである。「親も子も語り手が介在し入力具合で神の位置に押し上げられ」てはいる。しかし「頂上に誰が来ても変わらない」し、「三角形は姿を変えてどこにでもある。ただその三角形は常時はげしく回転し続けている」のである。暴き立てられるべきものは、簡単に暴かれる。語られている以上の秘密は存在しない。それこそが暴かれるべき秘密なのだ。

4. おわりに

それを象徴するのが、路地の元住人たちが集まる傾斜地での出来事だ。水の信心で方々を回ったさと子が浜村龍造の過去を、つまり「兄ちゃんは何も知らんのか。金持ちに成り上がったさか、蠅の王と言われたり蠅の糞と言われたりするのと違って、有馬におった頃や」（398頁）という事実を聞きつけて来たのである。結局「どこの馬の骨か」と噂されてきた男は幼少期に極貧の生活を余儀なくされてきた者だった。

「兄ちゃん、有馬ではみんな二人をただの乞食と思つたんよ」秋幸はさと子のお話を聞いてそれが本当なのだと思った。（中略）教団の裏切り、手勢の者の裏切り、浜村孫一の仏の国の理想、それは亡霊を慰藉するためにつくり出した浜村龍造の熱病にすぎなかった。（400頁）

むろん龍造の一族と浜村孫一の関係は不明だ。あくまで秋幸が、浜村孫一の物語を「枯木灘」で語られるような「不死への願い」の産物ではなく、祖父への慰藉の産物と推測するだけである。確かに龍造は自らの「不死」を願っているわけではない。しかし、別な形での永遠を考えていることが示唆される。龍造の素性が明らかになった後、秋幸は路地跡の草むらで龍造と奇妙な会話を交わす。例によって、秋幸が龍造の考えを推定として次のように述べている。

「龍さんがこう考えて山へ入るとるんじゃろと考えるとつたんじゃよ。（中略）草木じゃつたら、五百年ぐらい、雄しべと雌しべという自分の物だけで種つくって枯れてまた種つくって生き続ける事できるじゃろが、浜村孫一から五百年、わしら女の穴借りなんたら種を残せん宿命じゃ。どれぐらい他の者の種が混り込んどるか」（413頁）

人と違って別の種が紛れ込まず、純粹に長く存続できる樹木のことを、嫉妬し、水の信心をしてい

るのではないか。この言葉に続けてそう秋幸は言う。しかし龍造は「木がどんなに生きても再生しても、そんな歴史よう持たんじゃろと言う事」を知っていると答える。そしてさらに、謎の多い次の台詞を述べる。

「どっちにしてもわしは一たす一は一じゃし、三ひく一は一じゃと思とる。(中略) わしも生きつづける。浜村孫一も生きつづける。秋幸も生きつづける。同じ一じゃ。同じ種じゃ。わしは杉や檜にヤキモチ焼かん。(中略) 一に何を足しても一じゃし、一から何を引いても一じゃ。仏の国を夢みて負けて裏切られ続けた孫一殿は後の世の事まで知とったんじゃの」(414頁)

これは、「親」「子」「語り手」の一体性を語っているのではないか。つまりこの三位一体の三角形が語ることというのは、一見バラバラなように見えて一つのをめぐる語りであるということに他ならない。人間は結局のところ関係性の中にしか存在しない、存在できないということを主張しているのではないか。それは他者が存在しなければ、自己も存在しないと言いかえられるかもしれない。もしこれが龍造の考える「仏の国の理想」ならば、仏教で言う「縁起²⁰」について語っているのではないか²¹。

おそらく秋幸はそう感じ取ったはずである。そうでなければ「浜村龍造の考えは、衣食足りての事で、否応なしに一でありつづける者はそれがたまらない」とは考えまい。仏の教え一すべては一つだという考えに安心を見いだせるのは、現状にある程度の満足を得ている人間でしかない。だから「もし遠つ祖、浜村孫一が幾つ足しても引いても一である事を仏の国と言ったのなら、あたうる限り持つ物が少なく、弱く、疎まれ蔑まれる路地跡の浮浪者や傾斜地の元路地の住人がそれで、浜村龍造も自分も一でありうるはずがない」(415頁)と思うのである。そのように考えるからこそ、秋幸は路地跡を共有地にしたいと夢想する。

浜村龍造は地表から何もかも消し去る。蜜柑の木を一本残らず抜き去る。(中略) 浜村龍造は意味があつてそうしたのでない。蟻が巣を作るようにただそうしかつたのだ。意味はむしろ秋幸だった。意味の亡霊のように秋幸は路地跡を誰の所有でもなくし、そこに小屋を作って住む者らの共有にしようと思っている。(400頁)

確かに「物語」は「親」の所有だ。しかし、「語り手の入力具合」によって「親」の位置づけは神にも悪魔にもなるだろう。もっと言えば、「語り手」によって「物語」を受け取った「子」がどのようにそれを解釈するかという問題でもある。むしろ「物語」に対する「解釈」もまた物語でしかない。だからこそ「意味は秋幸」なのであり、秋幸は「解釈」を拒否するのだ。

明け方に龍造の書斎を訪れた秋幸は、龍造がまさに今、首を吊って自殺するということに鉢合わせしてしまう。だがそれをとめることもせず、ただ「違う」と「一つの言葉しか知らないように叫ぶ」

²⁰ 仏教における真理を表す言葉で、「因縁生起」を略して縁起という。現象的事物はすべて直接原因と間接原因の二つの原因が働いて生ずるとみる仏教独自の教説。基本的には「此有るが故に彼有り。此無きが故に彼無し」と規定される。

²¹ 佐倉は「老ボケした」と言われているが、「佐倉は言いたかった。今と過去が同じだし、佐倉と浜村龍造が同じだし、浜村龍造と秋幸は同じだ」(332頁)とあり、龍造と同じ考えだったのではないかと推測できる。

(444 頁) だけである。むろんたとえ秋幸が沈黙し、「解釈」を拒否しても、物語はまだ止まらない。

秋幸は浜村龍造に襲いかかり首をしめた。力なくしなだれかかって、決着をつけたとうそぶき、天井の太いはりにロープをかけ、浜村龍造をつるした。モンはそう考え、浜村龍造の死体を発見した友一が驚き、「兄やんがいま、ここを出ていたんじゃない。兄やんがやった」とひざまずきわめいたのはその事だと思った。(453 頁)

モンは考えることを止めないし、徹も「秋幸さんは人間じゃない。俺がそうつくった」(447 頁)と「語り手」の特権を手放そうとはしない。

だが、結局モンは「何の理由もなく、浜村龍造は死んだ」(454 頁)と思ひ至る。物語の意味は受け手が「解釈」する。「意味はむしろ秋幸」なのであり、「秘密が露出する事も未完結だった事も知って、秋幸の前で、命を切断した」(457 頁)浜村龍造にはないのである。秋幸は「解釈」を表明することで新たな物語が生れてしまうことを回避する。「三歳で別れたその男が何だったのか、すべて知ったと思った」(478 頁)が、知った内容も思った理由も秋幸は語らない。

秋幸のみならずモンやさと子も最終的に語り手の、すなわち解釈者の立場を放棄していく。「モンもさと子も、秋幸が傾斜地を通って、紀子に会いに行ったと思った。秋幸が紀子とその秋幸の子とも浜村龍造の子とも人の言う子供に会って、何を思ったのか誰にも分らない」(481 頁)のである。執拗に他人の行動を想像し、意味づけ、その考えを推定していたモンでさえ、龍造が生きたまま火葬されたと想像するユキをたしなめる。そして「その若い男の本当の気持ちを知らなかった」と思い、路地跡を包む炎の中で沈黙したまま秋幸を探すのみである。

確かに浜村龍造は「秋幸に切断面をつごうとした」のだが、秋幸は美恵の言うように「どこへ行ったんか分らんけど、どこそへ行く」のである。切断された物語を切断されたままにして。だからその切断面はわれわれ読者へと向けられているとも言えるのだ。切断された物語から何を受け取り、どう解釈するのか。それは中上健次から突きつけられた挑戦状でもある。

**On “Chi no hate shijo no toki (Supreme Time at the End of the Earth)”
: Changing Roles of “Parent,” “Child,” and “Narrator”**

HAYAKAWA Yoshie

Previous research on the work written by Kenji Nakagami investigated the status of the narrator Mon and changing descriptions of Ryuzo Hamamura. This study examines these two issues with reference to “Kishū: kinokuni, nenokuni monogatari (Kishū: A Tale of the Country of Trees and Roots), in which Nagami developed his argument on stories or novels, serial open lectures titled “Hirakareta Yutakana Bungaku (Open and Rich Literature)” and “Mongatari no Keifu (Genealogy of Stories)”.

Using the idea of Marebito (visiting Kami) proposed by Shinobu Orikuchi to support his argument, Nagami defined the triadic concepts, which consist of the “parent” who owns a story, the narrator and the “child” whose story is told by the narrator, and devised a method of telling a story by changing roles of the three. It can be said that “Supreme Time at the End of the Earth” was used as a testing ground for developing this narrative method and Nakagami tried to create a new style of novel through the work.

The findings from the analysis of the work through this narrative theory reveal that in contrary to the generally-accepted notion that Mon plays the role of narrator, Mon does not fit into the “narrator” of the triadic concepts as defined by Nakagami and rather she plays a role of offering alternative interpretations to a “story”. The characters in the work ultimately reject interpretations and give up the role of the “narrator”, which suggests between the lines that there are no more secrets than what is told in the work.

Keywords : Kenji Nakagami, “Chi no hate shijo no toki (Supreme Time at the End of the Earth)”,
Narrator, Shinobu Orikuchi, Marebito (visiting Kami)